

氏名 岩井吉彌
い わ い よ し や
 学位の種類 農学博士
 学位記番号 論農博第1254号
 学位授与の日付 昭和61年5月23日
 学位授与の要件 学位規則第5条第2項該当
 学位論文題目 京都北山地方における林業産地の形成
 ——磨丸太育林経営を中心として——

論文調査委員 (主査) 教授 半田良一 教授 森田学 教授 堤利夫

論文内容の要旨

戦前に形成された伝統的な林業産地には、地域の自然条件に適合した育林技術があり、育林の成果たる良質材を原木として、加工・販売を含む産地構造がみられた。これらの産地では、高度経済成長に基く木材需要の増大に際会し、地域外の一般の人工林に応急に育成作業を追加して原木に組み入れることが必要となった。その過程で、加工・流通面のみならず、育林技術及び森林経営の面でも構造変化を現出している。

本論文は、このような伝統的林業産地の再編のメカニズムを、京都北山の磨丸太林業を対象にして究明したものである。

論文は5章から成る。

第1章「北山地方の旧生産構造」では、中心地たる北山中川地区における昭和初期までの磨丸太林業形成過程を述べた。磨丸太商品は「自然物」としての形質が評価されるから、一本ごとに消費地の荷受問屋によって品定めされ、産地側の価格形成力は低かった。また当時の育林は台杉仕立てだったから、生産力も低位にあった。

第2章「旧構造から新構造への転換」では、昭和30年頃までの推移を記述した。磨丸太の流通範囲は名古屋から東京へと大幅に広がり、生産量が著増した結果、地区の産業も磨丸太生産に単一化した。育林面では、台杉の改植と旧雑木林への拡大造林によって、一斉林がほぼ整った。この林分を対象とし、従来よりも低い伐期、また従来よりも簡易で標準化した育成技術のもとで原木がつくり出された。またこのような育成技術が、中川地区の外圍の小野郷などへも拡大した。

第3章「北山地方の新構造の形成過程」では、30年代から40年代にかけての推移を述べた。高級大衆商品としての人工絞丸太に対する需要が全国に拡大したことが、この時期の特徴である。北山産地の圏域も広がって、京北町の南半を取り込むに至った。ところで従来の磨丸太原木は概ね40年生以上の林木だったが、人工絞丸太の原木としては、肥大成長のよい若齢木の方が適する。一方、磨丸太の成形の決め手となるのは枝打ちである。中川周辺の拡大地域の枝打ち技術は未熟だったが、絞加工を施すことによってこの

点をカバーできる。このように原木の「自然物」としての形質に対する要求が緩和されたことが、産地圏域の拡大を可能にした要因である。なお絞加工過程が附加されることにより、地元で多数の家内工業的加工業者が発生した。また人工絞丸太は用途が床柱に限定されるから、規格商品の性質が濃厚である。従って流通面でも、従来のように消費地問屋に依存する体質から脱却して、新たに発展した産地問屋の主導にかかる流通機構を確立することができた。

第4章「北山地方の現在の構造」では、磨丸太原木の育林を担う林家の中から、中川地区で7戸、周辺拡大地域で19戸を対象に選び、経営の特徴による類型区分を行い、各類型の性格を明らかにした。

まず周辺拡大地域にあっては、磨丸太原木育成部門と他部門との組み合わせにより、次の型を検出した。①磨丸太林業のみで自立しているA類型、②用材林業と磨丸太林業とを併列しているB類型、③用材林からの間伐材を磨丸太原木として育成しているC類型、④用材林業の一部として桁丸太原木を生産するD類型、⑤間伐材による磨丸太原木を少量間断的に供給するE類型、⑥択伐作業などの新しい型の森林施業と磨丸太生産との結合を試みているF類型。

中川地区の林家はいずれも専業の磨丸太経営だが、生産目標によって次の諸類型が検出できる。①45年前後の高齢の林木から高級絞丸太の3玉どりをめざすA類型（面積70ha以上）、②30～40年生の林木から高級絞丸太の2玉どりを行うB類型（15～70ha）、③27～28年生林木から平均的な絞丸太を生産するとともに、副業的に台杉施業によりタルキ生産を行うC類型（15ha以下）。

ともあれ中川地区は、地域内から産出する原木の質の多様性に基いて、北山産地の中枢部にふさわしく、種目・品質ともに多様な磨丸太を供給できる生産技術と経営体制を保持してきた。これに対して周辺拡大地域は、北山産地の機能のうち量産の部分を担当した。このように、北山に代表される伝統的林業産地は、中枢部分と周辺部分とで育林技術構造・経営構造の差異をもちながら、全体として需要の増大に対応できる産地構造へ再編を遂げたわけである。

第5章では、以上の所論を簡潔に要約した。

論文審査の結果の要旨

高度経済成長期には、木材需要の急増を背景にして、各地で木材産地が出現した。その中には、戦前に形成された伝統的な産地と、新興の産地とが見られる。新興産地は概して製材加工を軸とし、製材業の旺盛な販売活動によって一定の銘柄形成に成功したが、一般には特定の原料基盤を有せず、製材業の原木集荷力が産地形成を規定している事例が多い。

伝統的産地にあっても、規模を拡大するためには地域外の用材林から原木を求めざるをえない。ただし伝統的産地では概して、「自然物」としての木材に具わる意匠性が産地銘柄の主要な要素であり、地域の自然条件に適合した固有の育成技術によってその特性が保たれている。産地側の拡大運動は、外部の用材林の中の適木を選びそれに速成の成形保育を施して、原木に充当することを余儀なくするが、形質の低下を免れない。ある程度の低下は容認せざるをえないとしても、大幅な低下は産地銘柄の自己否定を意味する。もちろん新興産地の規模拡大にさいしても同様の障壁は存在するわけだが、伝統的産地が原木の形質低下を容認できる程度は、新興産地よりも遙かに狭いと考えられる。

従って伝統的産地の場合は、丸太市場からの適材の集荷によっては対応しきれず、林木の成長を制御する「育林作業」を多少とも実行することが不可欠の要件となる。著者が「林業産地」と称するゆえんである。

本論文は、京都北山の磨丸太産地を対象とする事例研究を通じて、伝統的産地の林業構造が産地規模の拡大に伴って変貌し再編される過程を明らかにした。なお磨丸太林業は短伐期生産だから、若齢林に対して各種の作業を実施し、林木の形質を比較的幅広く制御することができる。従って育林の担い手たる林家の側の条件に応じて、多様な種類の施業が展開される。磨丸太原木は、これら各種の林家から主産物ないし副産物として供給されるのである。

本論文の基本的な枠組は以上の通りである。林業における産地論については、新興産地を対象とした幾つかの研究業績があるけれども、伝統的産地についてその形成・拡大の実態を解明し論理化したことは、本論文の独創的な点である。またこれと関係して、磨丸太林業経営の内部構造を克明に調査分析し、経営と施業との関連の面から経営類型の定立を試みているが、これも林業経営分析の新しい方法として評価に値する。

このように、著者の分析と考察の成果は、林業経済学・林業経営学および森林施業論の分野において寄与するところが大きい。

よって、本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。

なお、昭和61年3月25日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、農学博士の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。